令和８年１１月２日　*vol.30*

「続けた先にある輝き」

県立神戸高等学校教頭
吉岡　雅記

○　秋季定期戦を終えて

秋風が心地よい季節となりました。

先週、兄弟校である兵庫高校との秋の定期戦が開催されました。前日の 10 月 28 日（水）には壮行会を予定していましたが、あいにくグラウンドの状況が悪く、放送による実施となりました。壮行会では、まず出場する各部活動の代表者が紹介され、その後、学校長や自治会長から激励の言葉が贈られました。さらに、選手代表としてラグビー部主将の後藤君が挨拶を行いました。

さて、定期戦当日は、週末の悪天候から一転して爽やかな秋晴れとなり、やや肌寒さを感じる中ではありましたが、令和８年度秋季定期戦が無事に開催されました。私は兵庫高校の校長先生とともに、剣道競技から見学を始め、全ての競技会場を回らせていただきました。
















各競技会場では、それぞれの種目の特色を生かした応援が繰り広げられていました。神高生の名物ともいえるタオルを力強く回す応援や、選手たちを鼓舞する熱い声援、さらには会場全体が一体となって盛り上がる応援など、どの会場も活気にあふれ、定期戦ならではの熱気に包まれていました。

また、応援団も各競技会場を巡りながら声援を送り、選手たちの力を後押ししていました。競技に全力で臨む選手たちの姿と、それを支える生徒たちの応援が一つとなり、神戸高校生の団結力と伝統の重みを改めて感じることのできる一日となりました。





午後になると、いよいよ定期戦のメイン競技であるラグビーの試合が始まりました。空模様は次第に怪しくなり、試合中には一時通り雨もありましたが、大きな支障もなく無事に実施することができました。ラグビーは、初めて観戦する人にとってはルールが複雑な競技です。得点方法もトライやコンバージョンゴール、ペナルティーゴールなどさまざまで、なかなか理解が難しいかもしれません。しかし、ひとたび試合が始まると、ボールを持った選手が力強く前進するたびに歓声が上がり、ラインアウトで選手が高々と持ち上げられる場面では会場全体が大きく沸きました。ルールの理解を超えて、選手たちの迫力あるプレーやひたむきな姿が、多くの観客の心を動かしていたように感じます。

この日、会場には両校合わせて約 2,000 人もの観客が集まりました。これほど多くの人々の声援を受けながらプレーできる機会は、一生に一度あるかないかでしょう。選手にとって、この定期戦はまさに特別な舞台であったと思います。

試合後には、審判を務めてくださった方から「このような大勢の観客の前で笛を吹かせていただき、ありがとうございました」という言葉をいただきました。その一言からも、この定期戦が選手だけでなく、試合を支えてくださった多くの方々にとっても特別な時間であったことが伝わってきました。

また、本年度も昨年度に引き続き、夢野台高校ラグビー部の皆さんに兵庫高校チームの一員として参加していただきました。伝統ある定期戦を実施できたのは、こうした多くの方々の支えと協力があってこそです。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。

実は、この時期には全国大会予選はすでに終了しており、3 校とも敗退しています。特に 3 年生にとっては、予選を区切りとして競技生活に一区切りをつける選択もあったことでしょう。しかし彼らは定期戦という特別な舞台のために練習を続け、仲間とともに努力を重ねてきました。そして、多くの観客の歓声に包まれながらプレーするという、かけがえのない経験を手にすることができました。

苦しいことや思うようにいかないことがあっても、目標に向かって歩み続ける。その先にしか見ることのできない景色があり、その先にしか味わうことのできない感動があります。

続けることでしか見えない景色がある。

３年生たちの姿は、そのことを教えてくれました。この日の歓声と感動は、きっとこれから先の人生においても、彼らの背中を押し続けてくれることでしょう。



